

識別番号	P 5
研究課題	アジアの大学におけるELE一経験の共有を目指して
研究代表者	西村君代（ヨーロッパ研究所・外国語学部イスパニア語学科）
共同研究者	Edelmira Amat（ヨーロッパ研究所・外国語学部イスパニア語学科）
Summary	The symposium “Meetings of teachers of ELE: experiences of teaching in universities in Asia” aimed to share experiences of teaching the Spanish language with teachers from Korea, the Philippines, Taiwan and Japan. Through the four presentations by invited speakers and the group discussion involving all participants of the symposium, it was found that, in spite of different educational systems or student types, universities in Asia share many common problems. As a result of the discussions, it was agreed that there was a necessity to continue this kind of academic and personal exchange to improve ELE (Spanish as a foreign language) education in Asia, where the environment for teaching and learning ELE is quite different from that in Europe.

## 1. 本研究の目的及び背景

イスパニアセンターとしての創設以来、時代とともに名称を変えながら50年の歴史を歩んできたイスパニア研究所は、2009年7月1日をもってヨーロッパ研究所に統合され、そのイベリア地域研究部門として再スタートを切ることになった。本研究は、新生ヨーロッパ研究所のイベリア地域研究部門としての最初の活動の一つである。

イスパニア語（スペイン語）は、約4億人もの話者人口を擁し、ヨーロッパ・アフリカ・アメリカにまたがる20以上の国・地域で用いられている国際言語であり、国連の公用語でもあるが、日本における立場は、たとえばフランス語やドイツ語と比べるとまだまだマイナーなものであると言える。とはいえ、本学を含む20近い大学で専攻外国語としての教育が行われており、また第二外国語として提供している大学の数も非常に多い。

この外国語としてのイスパニア語をELE (Español como Lengua Extranjera)と呼んでいるが、ELE教育の研究は当然のことながらヨーロッパを現場として想定したものが中心である。特に2001年に欧州評議会によってCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）が発表されて以来、ELE教育においては共通の枠組みという視点が重視されるようになってきた。一方、文化的・言語的背景がヨーロッパとは大きく異なる日本におけるELE教育を考えた場合、CEFRを中心とした流れはそのままでは適用できないことも多い。そして、同様の状況は日本以外のアジア諸国においても生じていることは十分予想される。そこで、非ヨーロッパ圏であるアジア諸国の大学においてELE教育に携わる研究者を招き、各国の状況の把握と問題点についての意見交換を行うシンポジウムを企画したのが本研究である。

## 2. 研究の方法・内容

本シンポジウムは2010年3月27日に開催され、韓国（高麗大学 Jaehak LEE氏）、フィリ

ピン（フィリピン大学ディリマン校 María LUNA VICO 氏）、台湾（台湾国立大学 Luisa Shu-Ying CHANG 氏）からそれぞれ研究者を招き、日本からは、本学一般外国語教育センターの廣康好美氏（上智大学）が発表者として参加した。シンポジウムは2つのセッションに分かれ、第1セッションでは、各発表者による各国・各大学のイスパニア語教育事情についての発表、第2セッションでは、参加者全員によるグループディスカッションが行われた。

第1セッションでは、同じアジア圏でも、フィリピンにおけるELEを取り巻く状況が、その歴史的経緯（1565年～1898年までスペインの植民地）から、日本、台湾、韓国などとは大きく異なっていることや、台湾、韓国においては、外国語教育に関して、日本よりも大きな人的・資金的基盤があり、それに伴ってより実践的なELE教育が可能となっていることなどが明らかになった。また、他の国々の大学では、日本で言うところのいわゆる（英語を第一としての）第二外国語という枠組みが履修上存在していないことが報告され、したがって、日本の発表者による、本学における第二外国語としてのELE教育の説明は、海外の発表者にとって非常に有益な情報提供になったようである。

第2セッションでは、参加者をグループに分け、あらかじめ準備したいくつかのテーマについてグループディスカッションを行った。参加者の大半は日本でイスパニア語教育に従事している教員であるが、そこに海外からの発表者が加わり、和気藹藹とした雰囲気の中で活発な議論が行われた。また、各グループでのディスカッションの内容は、参加者全体が共有できるよう、セッションの終わりに報告された。

### 3. 研究の成果

本シンポジウムでは、韓国、フィリピン、台湾、日本のELE教育事情の報告を通して、教育システムや学生気質などといった国による違いが明らかになっただけではなく、非ヨーロッパ圏であるという点に起因すると思われる問題点（イスパニア語との言語的距離、母語話者教員の不足、学習者のイスパニア語との接触の困難さなど）が共有されていることも分かった。日本からの参加者のコメントは、ふだん知ることのないアジア諸国の事情が明らかになり、今後の教育活動に具体的に参考にできる点が多くあった、という点で一致しており、また、海外から招いた発表者も、アジアにおけるELE教育従事者がこのような交流を行うことは、アジアにおけるELE教育の質の向上に必ずつながるという意見を残している。このような交流の必要性と意義は十二分に証明されたと言えるだろう。

しかしながら、今回は初めての試みであったために、方向性が総括的にならざるを得なかった面がある。今後の展開としては、より具体的な問題点に絞った企画を重ねていくことが必要となるだろう。

成果物として、本シンポジウムにおける発表内容やグループディスカッションの概要などが、イスパニア研究所時代から続く「スペイン文化シリーズ」の第18号として刊行されている。内外のELE関係者にとって有益な資料となることを確信している。

『Encuentro de profesores de ELE: Experiencias en el mundo universitario de Asia』

2010年5月31日刊行／B5版／全50ページ／言語・スペイン語

ISBN 978-4-921193-19-5